

# ドイツの図書館思想

Ideen der deutschen Bibliothek

河井 弘志 (立教大学名誉教授)

## 1. 図書館思想とは

これまで、ドイツの図書館学の歴史やドイツの公共図書館の思想史などについていろいろ書いてみた。そのなかで、いつも釈然としない気持ちになることがある。それは「図書館思想」という概念である。近年では「図書館思想」という概念がしばしば使われるようになり、この概念を標題に掲げる著書も多くなったが、じつは「図書館思想」というものがいったい何であるかについては、私にはまだはっきりしない。

修士論文で英米の図書選択について研究したとき、関係の著作をかたっぱしから読んで、そのなかの理論を探し出す作業をした。図書選択の実際でなく、図書選択に関する文献から学ぶ方法である。これをドクター論文にまとめて出版した<sup>1)</sup>。

次に、一度やりたかったドイツ図書館学の研究に着手し、立教大学から海外研究の機会をいただいて、ベルリンとミュンヘンで古典的な文献をコピーし、『ドイツ図書館学の遺産』という手作り本を作り、翌年これを圧縮して刊行した<sup>2)</sup>。図書選択論と同じく、著作や人物を個別に理論的に考察する「学説史的研究」である。

ひきつづきドイツの公共図書館論の研究にとりかかった。しかし公共図書館論は「学説」や「理論」としては論じにくいので、「思想史」というタイトルにした<sup>3)</sup>。

それでは「図書館学史」と「図書館思想史」はどう違うのか。「図書館史」とどうつながるのか。図書館文化史研究会の研究集会でこの問題について考えをまとめて報告した<sup>4)</sup>。今回あらためて「図書館思想」を考えることになったので、この概念をすこし丁寧に整理しておくことにする。

平凡社の『哲学事典』は「思想」にたいして、英語は thought, idea, ドイツ語は Denken, Idee をあげている。日本には「思想」と書いた書名の本が多いが、ドイツでは Denken や Idee を使った書名は少ないように思う。「思想」はやはり日本語である。ヴォドセク教授 (Peter Vodosek, 1939-) に意見を聞くと、「英語なら philosophy がそれにあたる。今回の講演のタイトルには、Ideengeschichte とか Konzept がいいだろう」とアドバイスしてくれた。この意見を参考にして、今日のタイトルを Ideen der deutschen Bibliothek と訳してみた。

丸山真男は「思想史」を「学説史」、「観念史」、「精神史」の3類型に分類した。「学説史」は純粹理論の歴史、「観念史」は世界観・人生観・意見の歴史、「時代精神」は各時代を代表する精神構造全体の歴史だ、というのである<sup>5)</sup>。図書館学や図書選択論の歴史は「学説史」に相当するが、ここでいう「図書館思想」を「学説史」と同じとみなすわけにはいかないので、第二の「観念の歴史」という類型に該当するものと考えられる。

今日私は、「図書館の理論」、および「図書館についての考え方」あるいは「意識」について考えることにする。これはすべて図書館を考える人の頭の中にある「観念」であり、現実、事実でないものも含まれている。実務が主体の図書館を「観念」だけで論じることにたいしては、当然、批判があった。しかし、図書館の現状に問題があるときは、現実への批判や理想・理念など、「観念」を論ずる必要がある。日本では、実務学図書館の領域で

も「図書館思想」の研究がおこなわれてきた<sup>6)</sup>。

試みに図書館学以外の領域で、標題に「思想」という概念を掲げた著作をさがしてみた。20世紀はじめは「教育思想の変遷」(1906)、「明治教育思想史」(1909)、「近代教育思想史」(1914)など、教育の分野でこの概念がつかわれてきた。理念や目的が先にたつ教育には「思想」という概念がなじみやすかったのであろう。梅根悟は「傑出した一人や二人の大思想家」だけでなく「大衆的、世論的な教育論」にも目を向けて「教育思想」をとらえる必要があるという<sup>7)</sup>。学説や理論にならない、一般民衆の教育論も「教育思想」に含まれるのである。

1950年代に入ると「社会思想」という書名が目につく。高島善哉は「社会思想とは、人間が社会の中で生き、行動する」ときに「もたなければならない態度決定」を含む観念だという<sup>8)</sup>。「理論」だけでなく、自分の行動を方向づける「態度決定」がなければ、それは思想とはみなせない、というのである。

文学の思想に関する研究は2000年代に多くなった。その底流には津田左右吉の『文学に現はれたる我が国民思想の研究』がある。津田は「思想」は「生活気分とか生活意欲とかいふべきことをも含」み、「国民の実生活から生まれ」るものだという<sup>9)</sup>。文学に表現される思想は、容易に理論的に解明できない、日常的に出ては消える意識であり、阿部謹也が「思想とはある個人の生の営みのなかで」生まれるもの、とした概念規定に通ずる<sup>10)</sup>。

岸田達也は、ドロイゼン (Johann Gustav Droysen, 1808-1884) が「歴史を探求する者が歴史をつくる者と同一である」と言ったことに注目して、研究者は史実にたいして客観的であることは不可能で、歴史を作る者としての責任を自覚しながら、史実を解明するところに「史学思想」の特質があるという<sup>11)</sup>。

以上を整理すると、思想とはまず目的や理念をもつ行動をささえる観念である。それは理論的に解明しがたい情緒、欲望をも対象にとりこむ思考であり、彫刻、絵画、音楽など、言語を媒介しない観念の表現も含まれる。

また思想は、評論に終わる意見ではなく、自分の行動をともなう「考え」であり、しかも環境のなかでの「態度決定」を含まなければならない。態度決定は、主体の生き方、人生観、世界観につながる意識であり、人格形成を使命とする教育の重要な課題でもある。

かつて安保闘争のなかで、吉本隆明と鶴見俊輔が「思想」とは何かを論議した。吉本は「いかなるあいまいさも残さないものでなければ思想とはいえない」と言ったのにたいして、鶴見は「あいまいさは思想にとって必要不可欠の条件である」と反論した<sup>12)</sup>。吉本がいうのは常に明快さが求められる「学説」であり、鶴見のいう「思想」とは違う。社会的実践を前提とする思想には、理論的に説明しきれないあいまいさが必ず残るものであり、無理に明快な理論で説明しようとする、破たんをきたすおそれもあると思う。

図書館の領域でも、たとえば価値論 (value theory) と要求論 (demand theory) という判断基準の間に厳密な一線が引けず、実務のなかでは適宜に基準を使いわけなどのあいまいさがある。気になる問題であり、いずれは理論的に解明されなければならないが、日常実践のなかではあいまいさを恐れてはならないであろう。

図書館に関する知識の大部分は応用知識であり、これを「思想」と呼ぶためには、どこかで人生観、世界観、理念につながる態度決定でなければならない。技術的な知識だけのものは、今回の考察からは省くことにしたい。

## 2. 修道院の図書館思想

ドイツ図書館史でまず注目をひくのは、修道院図書館である。修道院は人間が聖書に示された規範にしたがって生き抜くための特別の場として創られたもので、日々善行につとめ、悪いおこないを戒め、沈黙と謙遜を守り、聖書を読み詩編を唱え、労働に従事する生活の場である。聖書以外の図書の読書はあまり求められなかった。しかしベネディクト会修道院には立派な図書館が設置された。これは『聖ベネディクトの戒律』に読書が義務づけられたためである。

聖ベネディクト (Benedictus, 480 頃-543) は、カッシノに修道院を作って修道院制度を開いた人である。彼が規定した戒律 (Regula Benedicti) が後世につたえられ、ベネディクト修道院の基本法則になった<sup>13)</sup>。

食事の間は、朗読担当者が朗読する<sup>14)</sup>。夕食後も講話を聞き、伝記や有益な本を読む<sup>15)</sup>。読書は労働の日課に匹敵する「勤め」である。寝室でやすむときは「他の者の邪魔にならないように読書」してもよい<sup>16)</sup>。しかし自由読書ではなく、指定された図書に限定される<sup>17)</sup>。

図書は修道院の器具と同じ扱いをうけ、一覧表を作って管理される。修道院図書館がはじめ香具室におかれたのはそのためである<sup>18)</sup>。蔵書目録は蔵書管理のための一覧表であり、検索ツールではない。「写本」も労働のひとつとされ<sup>19)</sup>、これから写本活動が盛んになり、膨大な蔵書が形成された<sup>20)</sup>。

1170年、ゴットフリート (Kanonikus Gottfried, Geoffroy de Sante-Barbe-en-Auge) が「書庫のない僧院は兵器庫のない陣営のようなものだ」と書いた。読書は不可欠の日課と考えられ、書庫が必需施設になった<sup>21)</sup>。

初期は書見台に図書を置き (Pultsystem)、図書をクサリにつないだ<sup>22)</sup>。蔵書が増えると、「精神的栄養は身体的栄養の上」という意味で図書館を食堂の上の階におくというアレゴリーもあり、香具室 (Rheinau, 1570-79)、集会室 (Polling 1616-21)、礼拝堂 (Erfurt, 1566) などの上に置かれるなど、高い位置づけが与えられた。

蔵書は典礼用図書が中心で、書架ひとつあれば十分で、戸棚 (armarium) と呼ばれた。蔵書数が多くなると図書箱 (Bücher-Kasten) に収納された<sup>23)</sup>。ヒルザウ修道院では 1516年の箱が今も残っている。724年に設置されたライヘナウ修道院は人が出入りして学者のあつまる場所とみなされ、来客も蔵書を寄贈し、他の修道院との間に図書の交換もおこなわれた<sup>24)</sup>。ベネディクトボーレン修道院は、11世紀に金地のミニチュア画や飾り文字の写本、宝石で装飾された製本などを作成させ、1803年の修道院廃止のときは 40,000冊になっていた<sup>25)</sup>。

印刷術の発明によって図書の数が爆発的に増加し、書見台の上に固定して管理することができなくなると、壁面書架にかわった。バロック時代には修道院は華麗な建築となり、図書館ホール (Bibliotheksaal) 方式が主流になった。オットーボーレン修道院図書館は「シュヴァーベンのエスコリアル」と呼ばれ、天井漆喰、天井画、周囲に大理石円柱 44本が並び、その上階にギャラリーがめぐらされた華麗な図書館で、書架上部には分類名がかかげてあり、中央にアテネの立像がおかれた。

図書館は書見台という読書の場 (Arbeitsraum) から展示空間 (Schauraum) に変わった。蔵書は分類排架する方式が基本になり、歴史や人物のフレスコ画が分類主題を視覚的に説明した<sup>26)</sup>。

シュヴァルツヴァルトのザンクト・ペーター修道院には、禁欲、神学、世俗法・教会法、

哲学、医学、修辞学、数学、文法、詩、音楽、歴史の学問分野が書いてある<sup>27)</sup>。ベネディクトボイレンの分類は、文法、弁証法、修辞学、算数、幾何学、音楽、天文学などの自由学芸に、建築学、年代学、絵画、詩などが加えられた<sup>28)</sup>。

シュッセンリートのプレモンテ修道院には、哲学と神学の書架に向かい合って法学と医学が排架され、4学部、詩学、修辞学にむかいあって世俗史、教会史の学問が表示され、天井には各学問分野を代表する人物のフレスコ画がえがかれている<sup>29)</sup>。いずれも学問分類であり、分類法にはそれほど強い宗教性はない。

しかしメッテンには、マリアの受胎告知、トマス・アクイナス、ベネディクトの肖像画のほか、ヒエロニムスがキケロを読みすぎて鞭うたれる図、修道院長がヴァージルを読みすぎて毒虫の処罰を受ける図、などがある。図像で図書選択の基準を示し、正しい読書に誘導する配慮がうかがえる。

天井のフレスコ画にはことわざが書かれることが多い。メッテンでは聖書の「箴言(9,1)」の Die Weisheit hat sich ihr Haus gebaut (知恵は家を建て、7本の柱を刻んで立てた)がフレスコ画に書かれ<sup>30)</sup>、ザンクト・ガレンには、図書館の入口に「心の薬局」と書かれている。ここには、絵で図書館の機能を高める意図がある。

壁面書架になると、読書の場所がなくなる。1788年に修道院図書館管理法を書いたカルメル会士は、蔵書を僧房に分散排架して、各修道士が自分の部屋で読むことが多いと書いているので、個室で閲覧するのが標準だったのであろう<sup>31)</sup>。メッテン修道院では現在でも、神父が勝手に図書を自室にもちかえって読む。貸出カウンターがある修道院はみたことがない。カルメル会士は、図書館で貸出を管理すると、日常的に使われる図書まで管理することになるから避けるべきだという。蔵書は修道院の日課のための設備であり、図書は各自の責任において管理していたのである。

図書館ホールには中央にスペースがあるが、閲覧席に使われた形跡は稀である。図書館ホールには、分類した蔵書全体が一覧できるようにして、知識の全体を展望するという意義があるのであろう。

アモルト (Eusebius Amort, 1692-1775) は盗難防止のために書架の前面に格子づくりの扉をつける準開架(半開架)方式を提案した<sup>32)</sup>。これは修道院外の人の入館が多くなった近代の考えかたである。

シュッセンリート修道院図書館にはマキアベリズム、啓蒙主義などの邪教 (Irrlehre) を示す人物と、これを批判するカトリック弁護者の彫像が立ち並んでいる。カトリック教義によって蔵書を構成し、異端への逸脱を防御したのである。しかし1784年にザンクトガレンからきたハウントィンガー神父 (Johann Hauntinger) は、邪教の彫刻は「図書館とは別の場所にふさわしい思想である。なぜなら、図書館ホールはあらゆる種類の人々に開かれているべきであり、通りすがりの見知らぬ客と宗教論争をする場所ではないから」と書いている。啓蒙主義時代を経験した修道院の新しい図書館思想である<sup>33)</sup>。

ポリングのアモルトはバイエルの啓蒙主義思潮を開いた人物であり、ドイツ図書館学の開拓者でもある。彼は、全主題を「聖界」と「俗界」に二分し、前者には聖書、教父から典礼書にいたる教会関係主題9類、後者は哲学、法学から文法にいたる一般学問の9類を配置して、蔵書を対比する分類を提案した<sup>34)</sup>。キリスト教主題と世俗主題を対等に扱い、聖界と俗界を対比したのは、修道院図書館の特質を象徴的にしめした分類である。聖職者の精神構造に影響を与える意図で考えられた分類法であろう。

彼は書架目録を Catalog と呼び、著者目録、主題目録は Index と呼んで、区別した。書見台システムの書架目録を基本とし、アルファベット順目録で書架目録へ誘導する目録法で

ある<sup>35)</sup>。蔵書管理を重視する書架目録論から、検索ツール目録に進化する過程と、アモルト図書館学の先進性がよくあらわれている。

修道院図書館の思想について、次のようなことが言える。

- 1 修道院では、朗読であれ目読であれ、厳選された図書によって、信仰を深めるための日課として読書が行われた。読書の主体は聖職者であった。
- 2 信仰を妨げる図書は排除するか、有毒図書として厳重管理された。
- 3 手書き本のみの初期には図書は貴重品で、書見台に固定された。目録は蔵書管理のための手段で、写本も日課の労働の一つとみなされた。
- 4 活字印刷で蔵書が増加すると、多様な読書を認めながら、排架法、フレスコ画、彫像なども使い、図書館の施設全体で、信仰を深める読書になるよう、配慮された。
- 5 啓蒙主義の影響をうけて、自然科学を含む幅広い情報源を提供するようになった。バイエルンの啓蒙主義の源は修道院とその図書館であった。修道院間の交流もあり、世俗の研究者も図書館利用に加わり、蔵書整理法も一般図書館と同じ方向に進んだ。

### 3. ルネッサンスの図書館思想

ルネッサンス時代、学者が個人コレクションを収集する例が多くなった。アウクスブルクの法律顧問ポイティンガー (Konrad Peutinger, 1465-1547)、オランダの人文主義者エラスムス (Desiderius Erasmus, 1465-1536)、その友人ベアトゥス・レナヌス (Beatus Rhenanus, 1485-1547)、などの蔵書が知られている。

ベルンカステルのニコラウス・クサヌス (Nicolaus Cusanus, 1401-1464) は、ハイデルベルクやパドヴァで法律、数学、自然科学を学び、コブレンツで司祭となった。キケロの「共和国論」やタキトゥスの「ゲルマニア」を発見したとされている。故郷ベルンカステルの養老院に彼の蔵書が保存されている<sup>36)</sup>。

彼はガリレイより 160 年早い人で、天動説に疑問をもち、宇宙に中心は存在しないと考えた。近代自然科学的な考え方の人で、地球以外の星にも生物が住んでいる可能性を認めた<sup>37)</sup>。

養老院には彼の著書や文書、蔵書が保存されている。蔵書の核をなすものは 9 世紀から 15 世紀までのマヌスクリプト 314 点、インキュナビュラ 132 点である。彼 50 歳ごろにグーテンベルクが活字印刷法を発明したので、インキュナビュラも収集したのである。

代表的著作 *De docta ignorantia* (教化された無知? 1438-1440 年に執筆) はドイツの最初の古典哲学書で、中世哲学を「革命的に」変えたといわれている。この本に「地球は世界の中心ではありえないから、運動しないということもありえない」「我々にはそう見えなけれど、地球が本当に動いているということは既に我々に明らかになった」などと書いている<sup>38)</sup>。

蔵書には教会法、世俗法、ユスティニアヌス法典がある。彼が法律を学んだのはローマ法がドイツに移入された時代で、その頃に法学書を手に入れた。哲学書は枢機卿時代に秘書に写本させたといわれる。アリストテレスの著書、新プラトン主義、神秘主義者エックハルト、聖書はヘブライ語、ギリシャ語、ラテン語があり、ニコラウスの書き込みが多いという。医学書は 18 冊。ギリシャの医学者ヒポクラテスやガレノスの著書もある。天文学の本も 10 冊あり、地球儀、天体儀、天体観測機などもおいてあった。

他人に見せる目的でなく、彼自身の研究のために収集した蔵書であるから、本に書きこ

みが多い。宗教、哲学、自然科学に及ぶ広範囲の蔵書は、まさにルネッサンス的知識と関心を表している。周辺住民にはこの蔵書を読む能力も関心もなく、突出した知性の活動の結晶というほかない。こうした特質は、啓蒙主義者の蔵書にもみられ、これが多くの修道士、教授、大学生、市民を対象とする図書館との根本的な違いである。

ベーマー (Aloys Boemer) は、図書館旅行記もルネッサンス時代の特色の一つという。旅行家はマヌスクリプトやインキュナビュラをもとめて歩き、図書館や蔵書の状態を旅行記に書いて報告した。しかし本格的に旅行記が出版されたのは、17世紀末から18世紀の啓蒙主義時代で、たとえばザクト・ブラジエン修道院長ゲルベルト (Martin Gerbert, 1720-1793) は、教会音楽の楽譜収集のために修道院図書館を視察し、旅行記を出版した。図書館旅行記に挙げられた貴重資料は、修道院図書館の総合目録の役割をはたした<sup>39)</sup>。

#### 4. 宗教改革と公共図書館

1517年にマルティン・ルター (Martin Luther, 1483-1546) が宗教改革を宣言すると、教会の蔵書は新教の教会に引き取られることもあったが、処分されたものも多かった。テューリンゲンでは、70の修道院が世俗化され、破壊された。修道院の庭で破損され、焼却された蔵書は3000グルデンに達したところもあり、マイヒンゲン修道院では3000冊が破棄、焼却され、水中になげこまれ、商売人に売却された。ミュンスター大聖堂図書館も1534年に破壊され、蔵書は水中になげこまれ、聖書を除くすべての図書が大聖堂広場で焼却された<sup>40)</sup>。

しかしリューベックの市参事会は、マルクト広場でルターの著書を焚書し、新教の牧師がリューベックを追われ、新教市民は、25kmはなれたオルデスローまで出かけていかねばならなかった。カトリックの市当局とプロテスタントの市民が対立したのである。

教区民は、ルター派牧師を承認しなければ納税命令に従わないと決定したので、市参事会が譲歩して牧師が呼び戻され、説教が再開された。プロテスタント市民が納税を拒否したら、市財政は成り立たないのである。聖カタリナ修道院 (St. Kathariner Kloster) は学校になり、その他、老人ホームや救貧院になった修道院もある<sup>41)</sup>。

市内の動揺がつづいたので、参事会はルターに、新しい教会規則を作成するために学者を派遣することを要請、ルターはブラウンシュヴァイクなどの諸都市で教会規則を作ったブーゲンハーゲン (Johannes Bugenhagen, 1485-1558) を派遣した<sup>42)</sup>。

ルターは1524年に全ドイツの都市の市参事会員にあてて「キリスト教学校を設立し、維持するように」との書状を送り、「市役所は、優れた学校を管理し、通学を奨励する義務がある」とのべ、「最後に考えておかねばならないことは、とりわけ十分な財力のある大都市では、よき図書館 (librareyen)、または蔵書館 (Bücher heuser) を設立する熱意と経費を節約しないように」と説いた。これがおそらく、世界最初の、一般民衆のための公立図書館設立のよびかけであろう。ケークバインの研究にみるように、北ドイツ・ハンザ自由都市の公立図書館設立がこの時期に集中しているのはそのためである。

宗教改革は公立図書館史のなかで、きわめて重要な役割をはたした。しかし社会史としての宗教改革は、修道院とその図書館、およびカトリック文献を破壊し、市民に公開される市立図書館の設立を促したのである。ルターの意図とは別に、修道院図書館を破壊して、新しい図書館を作ったというのは、図書館の独自の存在が確立されておらず、時代精神の交代期における烈しい破壊と創造の波に翻弄されたことを意味する。同じことは19世紀の

修道院世俗化にもあてはまる。

ルターのいう市立図書館は、図書を選択して収集する。多くの言語の聖書を集め、最古、最良の注釈書も必要である。その他あらゆる知識分野の最良書を収集する。これまで聖職者、領主に独占されていた幅広い知識を、一般市民にも享受させようというのである<sup>43)</sup>。

ルターやメランヒトン (Philipp Melancton, 1497-1560) に並ぶドイツの宗教改革者ブーゲンハーゲンは、ルターを読んで宗教改革の信念を固め、ルターとともに大学教授、牧師として活動、教会制度の改革のためにブラウンシュヴァイク、ハンブルク、リューベック、ポメルン、コペンハーゲンで宗教改革と大学改革にとりくんだ<sup>44)</sup>。彼はリューベックでルターの図書館設立の呼びかけ文を読み、ラテン学校、カタリナ学校の設立にあわせて、図書館を設置する考えにいたった<sup>45)</sup>。

1531年にみずからつくったブラウンシュヴァイク教会規則を手本とし、リューベックの教会規則 (Kirchenordnung) を作成し、「図書館 (Librye, die Bücherei)」という章で「あらゆる図書、いい本も悪い本も」(alle böke gude unde böse) 集めることを求め、「このような図書から学ぼうとし、また学ぶことができる人には、それを妨げてはいけない」と規定した<sup>46)</sup>。

リューベック市も学校改革をおこない、全教会の図書館蔵書をカタリナ修道院の寝室 (Dormitorium) に集めた。1616年に教区監督とカタリナ校長が市立図書館計画に着手し、市長の協力を得て図書館が成った。元修道僧寝室に取りつけられた書架の上部に“1619”という数字が刻まれ、これが図書館設立年とされている。図書館の地球儀は図書館設立当時以来のものといわれ、日本は福島県あたりまでしかなく、オーストラリアは全く存在しない。この修道院の建物は14世紀に建てられたといわれるので、リューベック市立図書館の建物は700年間存在したのである。

蔵書は教会、市参事会、ラテン学校から集められた<sup>47)</sup>。1620年頃の利用規定には「あらゆる図書館利用者を歓迎」する、「教養や知識を学ぶのに役立つすべての図書を手に入れることができる」ようにするために「参事会が公共図書館 (Bibliotheca Publica) を設置することを決定し、年々蔵書を増加し、あらゆる知識分野の図書を備えつけ」と書いてある。図書館は水曜、土曜の1-4時に開館し、ラテン語学校の生徒が貸出し業務を担当する。貸出するには図書館員の許可が必要である<sup>48)</sup>。財産、身分、職業による利用資格の制限はまったくなかった。

ルターは教育機関としての図書館施設を考えた。宗教改革の思想を普及するための手段として公共図書館を普及しようとしたと理解される傾向があるが、カールシュテット (Peter Karstedt, 1909-1988) は「各個人の精神上の運命に対する決定は、彼自身に帰せられる」から、ルターの訴えは、個人が「自己の宗教的信仰を決定する際に、個人の方向づけに役立ち得る公共図書館の必要性を高めた」のだという<sup>49)</sup>。

前述のように、ブーゲンハーゲンの教会規則には、「われわれは良書や悪書のあらゆる書物を収集し、所蔵している文庫を持たねばならない。かかる書物から学び得、また学びたい人々には、閲覧は禁じられるべきではない」<sup>50)</sup>と規定されている。宗教改革者の著書だけでなく、カトリックの書物も提供されるのであり、宗教は個人の責任において選ぶべきだという思想が根底に存在した。

ルターの公共図書館思想は「教会における階級の平準化であり、個人を解放して、成人であると宣告する」ものであり、「宗教思想のなかにのちの通俗図書館運動を先取した思想と企図が現れている」。ただ、思想が存在すれば図書館ができるというものではない、とカールシュテットはいう。思想が実現されるには「社会的・政治的環境構造」が必要で

ある<sup>51)</sup>。

宗教改革は修道院を崩壊させ、プロテスタントの信仰を普及する運動が進められた。ただルターは宗教改革の目的で図書館を普及しただけではなく、公教育の確立にむすびつけた。読書主体の重心は聖職者から一般市民に移動し、図書館思想は公教育思想のなかに取り込まれたのである。

## 5. 啓蒙思想と歴史主義

カント (Immanuel Kant, 1724-1804) は「啓蒙とは何か、それは人間が、自ら招いた未成年の状態から抜け出すことだ」といって、すべての人間が自分の理性の力で真実を求めるべきだとの、新しい精神の方向を示した。修道院でカント啓蒙主義の影響を受けたシュレツティングァー (Martin Schrettinger, 1772-1851) は、退廃した修道院を去って、宮廷図書館に勤務、蔵書を合理的に組織化する仕事に従事した。この実務の経験をもとにして、彼は世界ではじめての「図書館学」の書を公にした。

彼の啓蒙主義者としての特質は「図書館とは・・・知識を求める人が、その中にある個々の論文を、不要な時間のロスなしに、自分の要求に従って利用できるように整理されているものである」とする定義に示されている。必要な図書を必要に応じて自力で請求し、入手することができない図書館は、図書館とはいえない。

ルソーが人間の本性から近代民主主義の政治の原理を示し、これがフランス革命をもたらしたように、シュレツティングァーも、啓蒙を求める人間の本性を起点として、読者がすばやく図書を入手できるような図書館に変える道筋を「図書館学教科書試論」に示したのである。膨大な蔵書を持ちながら利用できない図書館は、図書館とはいえない、と断言することによって、図書館の革命の道が開かれたのである。

したがって図書館学とは「目的にしたがって、図書館を整理するに必要なすべての命題の総体」であり、図書館にかかわるすべての命題は「個々の文献要求を充足するために必要な図書をすばやく発見」できるようにするという「ひとつの最高原理」にむすびつけられる。この最高原理から図書館学のすべての知識を演繹的に導いたのは、「我思う、ゆえに我あり」とする基本原理からすべての哲学理論を導いたデカルトを想起させる。いずれも、理性の示す最高原理から世界を再編しようとする啓蒙主義思想のパターンである。

シュレツティングァーは、ほしい図書がすばやく発見できることが図書館の「最高原理」であるとの構想により、問題の多い分類排架法を排除して、固定排架方式にあらため、専門目録、件名目録で主題検索をする組織法を提唱した。

このシュレツティングァー図書館学を正面から批判したのが、エーベルト (Friedrich Adolf Ebert, 1791-1834) である。エーベルトはドレスデン王立図書館で、フランケ分類で組織された蔵書を管理する仕事に従事した。彼は分類排架の難点は記号法の修正によって改善できると主張した。フランケ分類は、図書を主題の共通性によって集める「実際的同質分類」法である。たとえばライプツィヒ医学を「食事療法」へ、ライプツィヒ演劇を「演劇論」へ、ライプツィヒの花を「植物学」へ分類すると、ライプツィヒという「実際的主題領域」がばらばらにされてしまうので、これらの主題の本を「ライプツィヒ」のもとに集める。地理区分を重視するこの区分法は「歴史的区分原理」ともよばれる。

シュレツティングァーは、必要な図書が探し出せない図書館は図書館ではないと言うが、それでは昔は図書館が存在しなかったことになり、現在でも存在しないことになる。蔵書



があれば図書館である。こうしてエーベルトは、歴史上のすべての図書館の存在を肯定したのである。

フランス革命の挫折によって、ドイツの知識階層の間に反革命の風潮がひろがり、すべての存在を理性で論断する啓蒙主義が敬遠され、人間の生命や人間性を尊重しなければならない、中世にもいいものはあったとする、歴史主義の思潮が高まった。歴史には完全普遍のものは存在しないとすする相対主義、人間の感情を大事にするロマン主義もこの時代の思潮であった。

1887年にツィアツコがゲッティンゲン大学に開設した図書館補助学講座は、蔵書の整理や管理より、印刷術の歴史、古文書研究などに力をいれた。ドイツの大学の伝統は、図書館の実務学を学問として受け入れなかったので、歴史的研究によって学問性を与えようとしたのである。シュミット (Wieland Schmidt, 1904-1989) は1900年のプロイセン目録規則の「文法」主義も、古典文献学の歴史主義の影響をうけたためだという。

ミルカウ (Fritz Milkau, 1859-1934) の膨大な『図書館学ハンドブック』の、主要部分も図書館史であり、整理や管理運営は副次的に扱った。この著作をシュミットは「歴史的以外には何ひとつ思考できなかつた時代、実証主義の時代を通り抜けた時代の、栄光ある総決算であり、重要な記念碑でもある」と呼んだ。実証主義とは合理主義、啓蒙主義である。エーベルトの図書館思想は、ドイツ精神界が啓蒙主義から歴史主義へ重心移動した転換期の産物であった。

## 6 公共図書館思想

### 6.1 パイオニアの図書館思想

ドイツの公共図書館のパイオニアとみなされるプロイスカー (Karl Benjamin Preusker, 1786-1871) は、書店に勤務して啓蒙主義の影響を受け、従軍中は兵士と読書会を開き、ライプツィヒ大学で法学、歴史などを聴講し、グローゼンハインの役所に勤務するかたわら、公共図書館を作る活動をはじめた。イギリスのブルーム (Henry Peter Brougham, 1778-1868) の読書普及活動の影響も受けた。

1828年に町の学校のなかに図書館を設置した。これは一般教養を広め、実業教育をほどこす青少年教育である。知性を高め、有用知識を学ばせると同時に、精神的な娯楽を提供して道徳心を涵養し、宗教心を育てることを目的とした。政治論、小説、はやり読み物などは排除した。

1833年に「市立図書館」(Stadtbibliothek)に組織替えし、利用はゆるやかに増加した。蔵書は当初の実業中心から歴史・文学主導になった。彼は実業民の出身であったが、産業革命で工場生産と無産階級が増加すると、実業民がプロレタリアートに脱落する運命になり、貧困化する下層民衆への福祉事業に問題意識が移った。彼は革命思想を受け入れず、反体制、反君主制的な図書を排除するようになった。

教育界も、合理主義、主知主義的教育論が後退し、ヘルダー (Johann Goittfried von Herder, 1744-1803) の Humanität 思想が主導する人間性重視の教育論に主導権が移った。プロイスカーも「心情 (Gemüth) を考慮しない単なる悟性の啓蒙」は有害と考えた。彼の論文には Humanität の概念が頻繁に現れた。読書は「より高くより精神的な教育や真の文化へ導く」手段である。文明化だけでなく、真の人間の尊厳をめざす文化を志向する読書でなければならない<sup>52)</sup>。プロイスカーの図書館思想は、啓蒙主義の主知主義からヘルダーの人間性尊重の思想に転換した。

## 6.2 図書館の思想

プロイスカーやベルリンのラウマー (Friedrich von Raumer, 1781-1873) 教授が普及にとめた民衆図書館 (Volksbibliothek) は、教養階層のための市立図書館を利用できない一般民衆に、読書資料を提供する図書館で、1871年の「民衆教育普及協会」結成以後、数のうえで驚くべき発展を遂げた<sup>53)</sup>。しかし蔵書構成は通俗書が多く、規模も文庫程度で、これでは教養市民は利用しない<sup>54)</sup>。

アメリカの public library の実際を見てきたネレンベルク (Constantin Nörrenberg, 1862-1933) は、多様なレベルの図書を提供する図書館に改革しなければならないと考え、public library に相当するドイツ語として Bücherhalle (図書館) という概念を作った。

娯楽書中心の、学校でいえば小学校 (Volksschule) にあたる民衆図書館も必要だが、能力ある民衆にはもっと高いレベルの図書が必要である。そのために利用は無料、夜間も開館し、下層民衆から教養人までよまれる幅広い蔵書を提供する公立図書館が必要である。開架閲覧室を設け、新聞、雑誌も閲覧できるようにする。職員には、専門教育を受けた司書を配置する<sup>55)</sup>。

従来存在した学術書中心の市立図書館と民衆図書館を統合したような「統一図書館」 (Einheitsbibliothek) とするともいう。市立図書館 (Stadtbibliothek) は教養市民しか利用しないから、これを一般民衆にも利用される図書館にすれば統一図書館ができる。当時、民衆学校 (小学校) と、大学に入学する資格を与えるギムナジウムという2本線の学校システムを一本化するという「統一学校」論があり、ネレンベルクはこの概念を図書館に応用したのである。

統一図書館は教養図書館 (Bildungsbibliothek) とも呼ばれた。教養市民を対象とする市立図書館を一般民衆にも開放して、市民にひろく教養を提供するという思想である。それには、民衆図書館のレベルを高めるよりも、市立図書館を一般に開放するほうがいい。しかし決して市立図書館をレベルダウンする意味ではない。「教養人」と「民衆」を二分すると、民衆を階級闘争に追いやるので、ひとつの教養を平等に享受する制度が望ましいと考えたのである<sup>56)</sup>。

「図書館」「統一図書館」「教養図書館」の構想は幅広い支持を受け、ベルリン市立図書館にも閲覧室が付設された。1896年、シャルロテンブルクに閲覧室付きのパブリック・ライブラリーを建設する運動がおこった。イエーブ (Ernst Jeep, 1867-1936) は、蔵書は偏らない、あらゆる党派の日刊新聞を提供、図書館長は専門職、日曜開館、閲覧席は100席以上、などの原則を掲げた。彼は歴史の好きな市民しか利用しない市立図書館ではいけない、学校の空き部屋におかれ、週に1-2回しか貸出をしない民衆図書館もいけない、と主張した。こうして実現された、館外貸出と館内閲覧の両機能をはたす図書館は、労働者、商人、職人、役人、教師などに幅広く利用された。

1900年、イエーブの指導を受けたフリッツ (Gottlieb Fritz, 1873-1934) がシャルロテンブルク市立図書館長となり、翌年新図書館が開館した。周囲に2層のギャラリーをめぐらせ、中央に広い閲覧室を置いた、近代公共図書館の典型をなすものである。閲覧席はのちに150席に増加された。ギャラリーの図書は職員が出し入れする出納式だが、開架2700冊もあり、雑誌もオープンにされている開架式図書館である。

フリッツ自身も、中央図書館と民衆図書館とあわせて本館・分館システムとし、総合目録を編成するという、改革案を示した。貧民給食所にたとえられる民衆図書館を教養図書館に育てあげ、民衆も教養人も利用できる図書館にすべきである。閲覧室だけで貸出をしない読書館ではパブリック・ライブラリーとはいえない。図書館は公立図書館でなければ

ばならないが、国家が財源提供によって地方自治体の図書館に介入するのはいけない。

図書館は「あらゆる住民層の要求を同等に考慮」することが必要である。ネレンベルクは在来の市立図書館を民衆に公開して図書館とすることを考えたが、民衆図書館に育ったフリッツは、民衆図書館に閲覧室を設け、蔵書とサービスをレベルアップして図書館とすべきだと考えた。

かれは Volk の概念を、下層民衆ではなく、すべての階層を包含する「民族」という意味にとり、教養とはすべての人が自力で向上する自己啓発だと考えた。彼は単純な民族主義に流れず、国際的な展望を持つ民族を考えた。

ネレンベルクもフリッツも、これまで図書館サービスの対象にならなかった、中間市民層を図書館のサービス対象とみなし、中間市民が教養階層にはいる道を開こうとした。図書館の目が、社会のどの層に向けられているかによって、図書館思想の方向がきまるともいえる。

### 6.3 路線論争<sup>57)</sup>

1898年、ラーデヴィッヒ (Paul Ladewig, 1858-1940) が鉄鋼会社クルップに開館した社員のための図書館が驚異的な貸出をあげて、ドイツ公共図書館界は驚いた。彼は『図書館の政策』(1912) などにおいてアメリカ型の公共図書館を論じた。アメリカの要求論の流れを敏感にうけとめ、フィクション利用の正当性をみとめ、「利用者が命令すべきで、司書が命令するのではない」と言った。しかし単純な要求論に流れたわけではなく、一般教養図書館が学術図書館を補うという関係が望ましいというのである。

ところがライプツィッヒのホーフマン (Walter Hofmann, 1879-1952) は、ラーデヴィッヒが貸出数が多いことを誇るが、貸し出された図書がすべて読まれるとは限らない、貸出したらしっかり読むよう利用者を導くべきだと言って、ラーデヴィッヒを批判した。これにたいしてラーデヴィッヒを高く評価していた図書館派が、連名でホーフマンを批判する公開書簡を書いた。ラーデヴィッヒ派は旧路線、ホーフマン派は新路線とよばれ、このドイツ公共図書館界を二分する論争は「路線論争」といわれた。争点は「民衆図書館は一人の読者も見捨ててはならない」として通俗書も提供し、貸出を伸ばすべきか、それとも利用者を個人的に指導してレベルの高い読書へ誘導すべきか、である。

ホーフマンは、真面目な読者に良書を提供することが必要で、ついていけない読者は無視していいとした。彼はこれを「読者選択」という。この論争は答えをみないままに、国家社会主義の激浪にまきこまれたが、多くの図書が読まれることが重要か、いい読書がひろがるのが重要かという、いつの時代にも、世界中どこでも起こる論争である。

### 6.4 社会民主主義と公共図書館

ベルリンで下層労働者の子供の教育にあたり、民衆教育普及協会の事務局長となったテーフス (Johannes Tews, 1860-1937) は、『社会民主主義教育学』などの著書で民衆教育の普及を訴え、民衆図書館の普及にも尽力した。上層階級のためのギムナジウムと、下層民衆のための民衆学校 (小学校) の複線型学校教育制度は、教育の機会均等をきまたげているとあって、相互に交流できる「統一学校」制度を唱えた。しかし「統一図書館」論は支持せず、民衆図書館のレベルアップによって、民衆教育も向上させるべきと考えた。彼が普及してきた民衆図書館を全住民のための公共図書館としたかったのである。

「民衆図書館 (Volksbücherei) は、貧民給食所 (Volksküche) と同義での『民衆施設』という汚名を被っている」<sup>58)</sup>

ネレンベルクは歴史ある市立図書館を下方に開放することによって「統一図書館」を実現しようと考えたが、テーフスはそれでは「統一図書館」は民衆には利用しにくい、と考えて、民衆階層を教養階層に引き上げるには民衆図書館のレベルを引き上げるしかない、と主張したのである。しかし国家権力への不信感から、民衆図書館の公立化には同意しなかった。

彼は、何を読んだらいいかわからない読者に、図書館員が司牧者 (Seelsorger) つまり牧師の心でのぞみ、利用者との間に「高い知的、精神的レベルでの人間的関係を保ち、利用者から信頼され」るべきだとした。彼は図書館員を教師、医者、牧師と同格においたのであり、ホーフマンに通ずる面がある。

1918年に社会民主党政権が成立すると、テーフスを文部大臣にするという動きもあったが、教育に政治が介入するのを嫌って、社会民主党に入らなかった。

ピート (Willy Pieth, 1883-1934) は、シャルロテンブルク市立図書館のフリッツのもとに勤務し、社会民主党に入党、1919年にリューベック市立図書館長に就任した<sup>59)</sup>。ピートは分類目録などのほかに貸出カウンター目録 (Leihstellenkatalog) を作り、利用が多い新しい文学書がカウンター近くで検索できるようにし、民衆の利用に便宜をはかった。

リューベックでは、すでに1794年に「公益活動振興協会」 (Gesellschaft zur Beförderung gemeinnütziger Tätigkeit) が組織され、民衆福祉活動を行い、民衆に啓蒙書を提供する民衆図書館を設立した<sup>60)</sup>。有料制だが手工業者、職人、労働者、商人、公務員、主婦が利用した。

ネレンベルクの影響で、1899年、民衆図書館が公共読書館 (Öffentliche Lesehalle) となって、政治新聞を幅広く提供し、利用は急増した。1902年から市も補助金を交付し、リューベックの公文書も提供するようになった。1906年、司書教育を受けたオッテン (Bennata Otten, 1882-1955) が館長に就任して来館者は急増、1916年に貸出150,000冊となった<sup>61)</sup>。

ピートが市立図書館長に就任すると、財政難を克服するため、市立図書館と公共読書館を連結、集中管理 (Zentralisation)、公立化 (Kommunalisierung) をしようとした<sup>62)</sup>。彼は民間の公共読書館が通俗小説 (Schundliteratur) を多数購入する現状を批判、購入を集中管理しようとした。オッテンは集中管理に反対した。社民党と共産党が読書館の公立化を支持して、ピートが勝利し、オッテンは辞職したが<sup>63)</sup>、ピートは読書館長を兼務して、集中管理を実現した。しかしピートは「統一図書館」論を支持せず、学術的市立図書館、読書館、移動図書館が提携する3部体制がいいと考えた。

ピートは公共図書館は「社会教育的な任務」をはたす「一般教養図書館」であると考え、「図書館 (Büchereiwesen) は少数カーストのみの道具になってはいけない。全民衆の文化向上という共同の目標の達成に役立つ道具とならなければならない」と書いた<sup>64)</sup>。民衆図書館は、上層階級が下層民衆に与える慈善事業ではなく、教養市民が市立図書館を一般民衆に利用させるのでもなく、公共団体が民衆の読書を保障する制度である<sup>65)</sup>。

公共読書館は教養図書館とし、移動図書館は農村部のための図書館とし、市立図書館は資料を保存する学術図書館とする。もしこれらを一本化すると、すべてがだめになってしまう。3種から成る図書館システムを公立の施設とするしかない。これが社会民主党の政策であり、ピートの構想でもあった。

1931年、ピートが国家社会主義の図書を排除しているとの攻撃がナチスから加えられた。彼はあらゆる立場 (Richtung) の図書を収集し貸出していると反論したが、彼が社会民主党員であるとの理由で、1933年に解雇された。当時彼は健康を害しており、突然の解雇と家族の生計の不安もあって同年12月に死去した<sup>66)</sup>。

テーフスは下層民衆のレベルアップを求めながら、権力の干渉を嫌って社会民主主義の政治活動にたちいらなかった。ピートは図書館を「公立化」し、財政的基礎を確立し、学術図書館と民衆図書館の制度化をはかろうとしたが、公共図書館の自立性を守ろうとしたオッテンとの間に軋轢をおこした。公立化によって図書館サービスの自由な発展を維持できるかどうか、つまり公立図書館がいいのか、公共図書館がいいのか、という論争は日本でもあった。

## 7. 国家社会主義と図書館

1933年、国家社会主義によって、全国の学術図書館も公共図書館も、一気に画一化（Gleichschaltung）された。この時代については、公共図書館員協会長シュスターの図書館思想についての、櫻田糸子の研究があるので、それによって国家社会主義のなかの図書館思想のひとつの例をみていく<sup>67)</sup>。

シュスター（Wilhelm Schuster, 1888-1971）は、ベルリン大学で哲学、古典文献学などを学び、ヴァイマル共和国になってハレ大学図書館、ベルリン市立図書館に勤務、1926年同館副館長、ハンブルク市立図書館の館長を経て、フリッツのあとをついでベルリン市立図書館長に就任し、ドイツ公共図書館員協会の会長に選ばれた。

シュスターは路線論争のなかで、ふたつの路線の仲介をしようとした。思想的にはヘルダーの Humanität 思想から強い影響を受けたが、Volksbildung（民衆教育）を Volkbildung（民族形成）の意味に解釈して、民族主義へむかった。フェルキッシュ（Völkisch）といわれた反ユダヤ民族主義の影響も受け、民衆図書館は書物によってドイツ精神の純粋性を守る人間育成の場になるべきだとみなした。読者が何を読むかにたいして図書館員は責任があり、蔵書粛清が必要だとも言った。粛清されるべき図書は、国家を批判するもの、民族共同体を分裂させるもの、などである。

図書館員は民族の教育者であり、文献をよく知り、読者と本の仲介者にならねばならない。民衆図書館は民族・人種を重視する、ナチス的な人間を育成する教育機関である、図書館利用者を選別する、帝国内の図書館を同質化する、などの柱によって支えられるという考えである。彼は移動図書館を重視し、農村部への図書館サービスに力をいれ、国家社会主義思想を国の隅々まで行き渡らせようとした。

シュスターはナチスの政策にしたがって活動したが、それが彼の真意であったとはいえない。市立図書館長、民衆図書館員協会長という立場から、図書館員の教育に責任を負う立場にあったので、ナチスの政策を容認し、その枠のなかに図書館員をおしこめることによって、図書館員の安全を守ろうとしたともいわれる。戦後、彼はナチス協力の責任で1年間投獄された。

国家社会主義によってフリッツやピートのように、排除され、生命まで失った図書館員もあり、最後まで図書館の自由を守ろうとしたライ（Georg Leyh, 1877-1968）のような図書館長もあったが、人間として生き残るために権力の命令に黙って従い、嵐のすぎるのを待ったシュスターのような生き方もあった。戦後、73歳のときに書いた図書館員の一般教養論をみると、彼の図書館思想を別の角度から見直すこともできそうである<sup>68)</sup>。

## 8. ドイツの図書館思想の特質

ドイツの図書館思想をみると、それぞれの人の持っている社会思想、宗教思想、政治思想などが外枠となって、そのなかに図書館思想が位置づけられるように見える。図書館思想は独立して存在できるものではなく、より大きな思想や政策のなかで方向づけされるものである。

より大きな思想は、宗教であったり、哲学であったり、教育思想であったり、政治思想であったり、権力構造であったりする。図書館はほんらい、こういう環境思想の支配を受けることを嫌うものであるが、現実には環境思想に翻弄されてきたように見える。

図書館思想は国や地方により、時代によって変化するものであり、全世界に、あらゆる時代に普遍的に妥当する図書館思想は存在しない。常に普遍妥当性を追求する理論や技術との本質的な違いがそこにある。

設置者が誰であるかによって、図書館思想がちがってくるが、図書館の奉仕対象が誰であるかによっても違ってくる。公共図書館がどの社会層に目をむけているかによって、図書館の存在意義が違ってくるようである。

カールシュテットは、各時代、各社会の意識や観念の総体を「客観精神」と呼び、図書館の蔵書構成や、目録方式に投影されると考えた。しかし精神は超然として存在するものではなく、「下から」社会的に規定されるともいう。この「社会拘束性」は、各時代の社会において、はっきりと認められた。図書館思想は社会の影響力からも遁れられないのである。

図書館思想は常に「環境思想」や「社会拘束性」に従属しなければならないのであろうか。しかし図書館思想史の転換期には、その時代精神への屈従を拒否して、果敢に「態度決定」し、歴史における責任を自覚しつつ行動した人もあった。いつの時代にも、明日の図書館をしっかりと捉えた「創造的な図書館思想」の持ち主が、図書館の世界を動かしてきたことを忘れてはなるまい。

ドイツの図書館思想を日本やアメリカの図書館思想と比較するのは、今の私の手にはおえない。むしろみなさんのお考えを聞かせていただけるとありがたい。

- 
- 1) 河井弘志『アメリカにおける図書選択論の学説史的研究』日本図書館協会、1987.
  - 2) 河井弘志『ドイツ図書館学の遺産』（改訂版）藤代：著者、2000. Das Erbe der deutschen Bibliothekswissenschaft.
  - 3) 河井弘志『ドイツ図書館学の遺産：古典の世界』京都大学図書館情報学研究会、2001.
  - 4) 河井弘志「図書館史と図書館思想史と図書館学史」『図書館文化史研究』No. 22, 2005, p. 1-27.
  - 5) 丸山真男「思想史の考え方について：類型・範囲・対象」『忠誠と反逆：転形期日本の精神史的位相』筑摩書房、1992, p. 355-388.
  - 6) 小倉親雄『アメリカ図書館思想の研究』日本図書館協会、1977、本書に収録された論文「メルヴィル・デュイの図書館思想とその形成」は、はじめ『図書館界』1967年9月号に掲載された。  
岡田温『図書館：その本質・歴史・思想』（増補版）丸善、1980。  
小倉親雄『美國図書館思想の研究：Melvil Deweyの思想とその業績』朴熙永訳、亜細亜文化社、1990。  
川崎良孝『アメリカ公共図書館成立思想史』日本図書館協会、1991。  
森耕一追悼事業会編『公立図書館の思想と実践』京都大学図書館情報学研究会、1993。  
『ボストン市立図書館は、いかにして生まれたか：原典で読む公立図書館成立期の思想と実践』川崎良孝解説・訳 京都大学図書館情報学研究会、1999。  
川崎良孝、高鉦裕樹『図書館・インターネット・知的自由：アメリカ公立図書館の思想と実践』京都大学図書館情報学研究会、2000.

有山崧没後30年記念集会実行委員会編『有山崧：その思想に学び、これからの図書館を考える：没後30年記念集会』同実行委員会，2000.

河井弘志『ドイツの公共図書館思想史』京都大学図書館情報学研究会，2008.

『ボストン市立図書館とJ.ウィンザーの時代(1868-1877)：原典で読むボストン市立図書館発展期の思想と実践』川崎良孝解説・訳；久野和子，川崎智子訳，京都図書館情報学研究会，2012.

河井弘志『マルティン・シュレッティンガー：啓蒙思想と図書館学』周防大島(山口県)：日良居タイムス，2012.

- 7) 梅根悟『西洋教育思想史1：紳士教育論の時代』誠文堂新光社，1968，p.4.
- 8) 高島善哉，水田洋，平田清明『社会思想史概論』岩波書店，1962，p.11.
- 9) 津田左右吉『文学にあらわれたる国民思想の研究』第1巻，岩波書店，1951，p.5-9.
- 10) 阿部謹也『阿部謹也著作集8：社会史とは何か：歴史と叙述』筑摩書房，2000，p.7.
- 11) 岸田達也『ドイツ史学思想史研究』ミネルヴァ書房，1976，p.8.
- 12) 鶴見俊輔『鶴見俊輔座談：思想とは何だろうか』晶文社，1996，p.153-154.
- 13) *Regula Benedicti: Die Benediktinusregel: lateinisch-deutsch*/hrsg. im Auftrag der Salzburger Äbtekonzferenz. Beuron: Beuroner Kunstverlag, 1992, S.31-47.  
『聖ベネディクトの戒律』古田暁訳. すえもりブックス，2000，p.170-187.
- 14) 前掲3)『聖ベネディクトの戒律』p.141，156.
- 15) 前掲3)『聖ベネディクトの戒律』p.170-171.
- 16) 前掲3)『聖ベネディクトの戒律』p.188-189.
- 17) 前掲3)『聖ベネディクトの戒律』p.190-191.
- 18) 前掲3)『聖ベネディクトの戒律』p.141-143.
- 19) 前掲3)『聖ベネディクトの戒律』p.229.
- 20) Löffler, Kl. *Deutsche Klosterbibliotheken*. Bonn & Leipzig: Schröder, 1922, S.183-385.
- 21) *Ibid.*, S.7.  
Wischermann, Heinfried. “》Clastrum sine armario quasi castrum sine Armamentario 《: Bemerkungen zur Geschichte der Klosterbibliothek und Ihrer Erforschung,” *Die Weisheit baut sich ein Haus: Architektur und Geschichte von Bibliotheken*/hrsg. von Winfried Nerdinger. München: Prestel, 2011, S.93.
- 22) Löffler. op. cit. S.22-26.
- 23) *Ibid.*, S.14.
- 24) *Ibid.*, S.105 ff.
- 25) *Ibid.*, S.171-172.
- 26) Lehmann, Edgar. *Bibliothekräume der deutschen Klöster in der Zeit des Barock*. Text. Berlin: Deutscher Verlag für Kunstwissenschaft, 1996, S.17-18.
- 27) *Ibid.*, S.266-267.
- 28) Weber, F. Lo. “Das Bibliotheksgebäude des Klosters Benediktbeuern,” *Jahrbuch des Vereins für christliche Kunst in München e.V.* XVI. Bd. München, 1987, S.198-199.
- 29) Lehmann. op. cit. S.258.
- 30) *Ibid.*, S.198
- 31) 前掲3), p.133.
- 32) 前掲3), p.84.
- 33) Lehmann. op. cit., S.12.
- 34) 前掲3), p.88.
- 35) 前掲3), p.89-91.
- 36) Bömer, Aloys. “Von der Renaissance bis zum Beginn der Aufklärung,” *Handbuch der Bibliothekswissenschaft*. 3-1. Wiesbaden: Harrassowitz, 1957, S.535-536. 『岩波西洋人名事典』(増補版)岩波書店，1981.
- 37) *Nikolaus von Kues 1404-1464: Leben und Werke im Bild: der große Denker an der Schwelle des Mittelalters zur Neuzeit*/Dokumentation von Helmut Gestrich, in Zusammenarbeit mit der Landesbildstelle Rheinland-Pfalz und der Cusanus-Gesellschaft, Bernkastel-Kues. Mainz: s. n., 1993. (Leben und Werk im Bild), S.18-19.
- 38) *Ibid.*, S.88-89.
- 39) Bömer. op. cit. S.594-599.
- 40) *Ibid.*, S.563.
- 41) Höppner. op. cit., S.64.

- 
- 42) Ibid. , S. 63-64.
- 43) Bömer. op. cit. , S. 272.
- 44) *Meyers grosses Konversationslexikon*.
- 45) Fligge, Joerg. "Ein Ort der Humanität: 378 Jahre Lübecker Stadtbibliothek," *BuB*. 49 (1997) , 10, S. 688.
- 46) Carstensen, Richard. "350 Jahre Stadtbibliothek Lübeck: verpflichtende Tradition," *Norddeutsche Familienkunde*. Bd. 9, 21. Jg. Heft 3 (1972), S. 194.
- 47) Fligge. "Ein Ort der Humanität" , S. 688.
- 48) Fligge. "Stadt und Bibliothek: Literaturversorgung als kommunale Aufgabe im Kaiserreich und in der Weimarer Republik: das Bibliothekswesen der Freien und Hansestadt Lübeck in den Jahren 1870 bis zum Beginn des Nationalsozialismus," *Stadt und Bibliothek*. Wiesbaden: Harrassowitz, 1997, S. 63.
- 49) Karstedt, Peter 『図書館社会学』 [Studien zur Soziologie der Bibliothek] 加藤一英, 河井弘志訳, 日本図書館協会, 1980, p. 15-16.
- 50) 前掲 9), p. 16.
- 51) 前掲 9), p. 17-18.
- 52) 前掲 6) 『ドイツの公共図書館思想史』 p. 40.
- 53) 前掲 6) 『ドイツの公共図書館思想史』 p. 52.
- 54) 前掲 6) 『ドイツの公共図書館思想史』 p. 61.
- 55) 前掲 6) 『ドイツの公共図書館思想史』 p. 104-105.
- 56) 前掲 6) 『ドイツの公共図書館思想史』 p. 130-131.
- 57) 前掲 6) 『ドイツの公共図書館思想史』 第 12 章.
- 58) 前掲 6) 『ドイツの公共図書館思想史』 p. 26.
- 59) Fligge. "Stadt und Bibliothek," S. 115-116.
- 60) Ibid. , S. 94.
- 61) Ibid. , S. 113.
- 62) Ibid. , S. 106, 120.
- 63) Ibid. , S. 124-126.
- 64) Ibid. , S. 117.
- 65) Ibid. , S. 116-117.
- 66) Ibid. , S. 156-157.
- 67) 櫻田糸子「ナチズム下の民衆図書館論: シュスターの図書館論を中心として」『図書館界』Vol. 45, No. 5, 1993, p. 408-424.
- 68) Schuster, Wilhelm 「司書の一般教養: 司書の養成における文化論・学問論」『司書の教養』河井弘志編訳. 京都大学図書館情報学研究会, 2004, p. 77-105.